文　化

仏人兵士2度は死なせぬ

◇「義和団の乱」で負傷し広島で落命、墓の存在を子孫に◇

原野　昇

広島市南区に比治山という高さ70メートルほどの山がある。広島市現代美術館などがあるこの山の南端には戦争で命を落とした兵士を弔う陸軍墓地があるが、その一番奥にひときわ目立つ慰霊碑がたっている。刻まれているのはフランス語だ。「中国に出征し、1900年に広島で亡くなったフランス人兵士をしのんで」

◪ □ ◪

100年の節目で調査

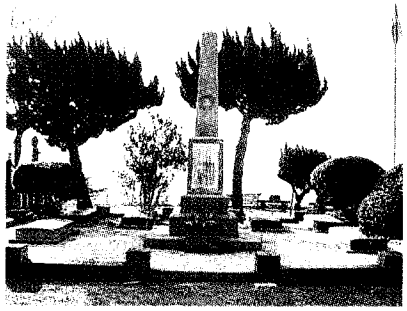
中国の1900年といえば清朝末期、義和団の乱が起きた年だ。欧米列強の排除を目的に民衆が蜂起し、日本やフランスを含む連合軍が鎮圧にあたった。そこで負傷したフランス兵士120余人が治療のため広島に運ばれたが、不幸にも7人が命を落とした。彼らがここに葬られている。

この墓地は広島における日仏友好の象徴であり、歴代の駐日フランス大使は必ずここを訪れている。広島大学で長くフランス語の教師を務めた私はもちろんこの墓地のことを知っていたが、義和団の乱から100年をまもなく迎えようという99年に、ふと思った。ここに葬られている兵士たちの子孫は、自分たちの先祖が遠い日本の地方都市でこうして葬られていることを知らないのではないか。何とかして伝えてあげることはできないだろうかと。

◪ □ ◪

出身地の自治体も協力

広島日仏協会の役員だったこともあり、当時の駐日大使に相談した。「兵士たちの出身地はわかっているのだから、まずはその地元自治体に問い合わせをしてみてはどうか」。なるほどと思い、7つの市町村の首長あてにことの次第を説明する手紙を書いた。するとすべての市町村から丁寧な返事が来た。いずれも「調査に協力する」という申し出で、やがて資料が送られてきた。



慰霊碑を取り囲むように
7つの墓石が並んでいる

出生証明や軍隊への登録証などから、おぼろげながら7人の兵士の背景が浮かび上がってきたが、子孫への手がかりはなかなかつかめない。兵士らはまだ若く、未婚の者が多かったから、直系の子孫は存在しない人が多い。つまり兄弟姉妹の子孫を探す必要があった。

やがて2つの自治体から連絡があった。一つは大西洋に面したブルターニュ半島のランベオック という町からで、「郷土史家の協力でコランタン・ポスティックの子孫が見つかった」という。ポスティックは31歳で亡くなった操舵手だ。その弟の孫にあたるイレーヌ・ポスティック夫人という人物が今もランベオックにいたのである。もう一つの便りは中部のオーベルニュ地方のエダという町から来た。こちらは町会議員の尽力で、歩兵フランソワ・コエンディ（享年30）と遠い親戚関係になるドミニク・プランシエール夫人とその娘さんに行き当たった。2003年のことである。

同年、私は両町を訪れ、イレーヌさんとドミニクさんにお会いした。イレーヌさんは「大叔父は中国で死んだと思っていた」といい、広島に墓があることに感銘を受けている様子だった。両町とも、町をあげて歓迎してくれ、郷土料理とワインの夕食会を催してくれた。04年には当時のジャック・シラク大統領から感謝状まで頂戴した。

◪ □ ◪

今でも有志が手入れ

義和団の乱が起きた当時の日本は欧米諸国に追いつこうと必死だった。外国人の負傷兵の受け入れは当初は赤十字社が担ったが、「諸外国から一人前とみなされるには、こうした人道支援は国がやるべきだ」として、閣議決定を経て陸軍病院が外国人兵の治療にあたったという経緯がある。

その人道精神は今も生き続けており、比治山のフランス人墓地は有志の手できれいに掃除され、花が手向けられている。広島の人たちが100年以上も昔に亡くなった見知らぬ外国人の墓を自分たちの祖先の墓のように心を込めて手入れしているのである。

フランスは戦没者をいつまでも記憶するために各地に慰霊碑がある国だ。政治色はなく、ただ死者をずっと忘れないでいようという市民の思いがそこにはある。エダを訪問した際に、調査に協力してくれた町会議員が、ホロコーストを生き延びたユダヤ人作家エリ・ヴィーゼルの言葉を引いたメッセージを寄せてくれた。「死者のことを忘れたら、彼らは2度死ぬことになる」

故国の土を再び踏むことがなかった7人はさぞや無念であっただろうが、広島の人々は今も彼らのことを忘れてはいない。兵士らの魂の安らかならんことを祈っている。（はらの・のぼる＝広島女学院監事）